

## Ⅱ. ケアが拓くコミュニティ

—「ケアメンサミット JAPAN」の実践から—

津止正敏・西田朗子

はじめに

1. 「ケアメンサミット JAPAN」開催の背景と目的
2. 「ケアメンサミット JAPAN」の実行体制
3. 「ケアメンサミット JAPAN」のプログラム
4. ケアメングループの活動実態  
—プロフィールシートから—
5. ケアメングループ組織化の意義  
—プログラム開発とケアコミュニティー

資料1—「ケアメンサミット JAPAN」参加者アンケート結果

資料2—「ケアメンサミット JAPAN I・II」参加団体一覧

資料3—「プロフィールシート」

今年「男性介護者と支援者の全国ネットワーク（男性介護ネット）」が発足して5周年という節目の年となりました。5年前（2009年）の3月8日、女性に「パン（経済）とバラ（尊厳）を」をスローガンとする国際女性デーの日に、奇しくも私たち男性介護ネットは発足しました。新しい介護社会の建設に男女が共に手を携えて歩いていこうと決意を固めた日です。女性たちにならって介護する男性の分野でも「パンとバラ」のスローガンを掲げようとも思いました。

それから5年。介護保険制度はその改定の度に窮屈さを増し、虐待や心中など不幸な介護事件は後を絶たずにむしろ深刻化が指摘されているように、この社会の抱える介護問題に正面から向き合おうとしない反介護の政策や実態も広く深く残っています。しかし、それでもこの短い期間にもかかわらず劇的に変化したことも数多く生まれています。新聞、テレビ、雑誌、映画、イベント等々まさに「介護ラッシュ！」ともいうような介護への社会的関心の広がり、育児とともに介護と仕事の両立を課題とするワーク・ライフ・バランスの浮上、ケアする人のケアともいべき介護者支援法や「介護退職ゼロ作戦」という新しい社会運動の登場等々、私たちのささやかな問題提起がわずかながらも貢献したことも少なくありません。

この5周年という節目の年を記念して、私たちはWAM（独立行政法人福祉医療機構）の平成25年度助成事業の支援を得て「ケアメンサミットJAPAN」と称する大きな啓発イベントに取り組みました。本稿では、この助成事業を振り返りながら、その成果と課題を確認し、これからの介護する男性（ケアメン）たちのネットワークの意義やその展望を記して、本事業の総括と報告としたいと思います。

## 1. 「ケアメンサミット JAPAN」開催の背景と目的

### ①ケアメンとそのグループの急増

この事業の企画段階において当初私たちが把握していた各地のケアメングループ（男性介護者組織）は約 50 団体でしたが、その後「ケアメンサミット JAPAN」の開催にむけて実施した事前調査などを通して、各地に 100 を超えるグループが活動していることが判明しました。この実数の把握事態も今回の助成事業の大きな成果の一端ですが、各地の関係者に呼び掛けて、まずは各地に生まれ活動を始めている「ケアメングループ」との交流機会をつくり社会啓発の一環としていこうと企画したのが今回の「ケアメンサミット JAPAN」でした。男性という新しい介護者の知恵と経験を集約・交流し社会の共有財産として蓄積していくことが可能となるのではないかと。また、抱え込みや孤立等という男性介護者に顕著な諸課題がフォーカスされることによって生まれる政策効果も期待されるのではないかと。さらにこのサミットを通してケアメングループとその活動を全国各地の自治体・地域に広げていく契機ともなるのではないかと。そして、男性の介護者のみならず全ての家族介護者と被介護者の福祉向上に寄与するのではないかと、等々幾つかの仮説設定を行いながらこの事業に取り組んできました。

認知症や難病、寝たきりなど心身に障害のある家族を介護する人は、これまで長い間「介護者」という一般語で括られてきました。介護する人は、以前はその殆どをそしてもなお多くを女性たちが担っているのに、けっして「女性介護者」とは呼ばれることはありませんでした。介護者といえば女性であることを言わずもがなに語っていた時代の反映だと思えます。しかし、いまや主たる介護者の 3 人に 1 人は男性、その数 100 万人を超えるまでになりました。介護する男性を主要なターゲットとする私たちの男性介護ネットも発足し、それを前後して「男性介護者」という新しい介護者に関心が集まり始めました。イクメンに倣って名付けられた「ケアメン」への認知も広がり、各地にケアメンを冠したグループや集い、講座などのイベントも盛んに開かれるようになりました。こうした会や集いを主宰する者は私たちが 2013 年 10 月に行った調査によればおよそ 100 か所にもなります。これはもう「事件」です。

そこでは自らの介護体験を語り、またその話に耳を傾ける多くの男性介護者が参加し、配偶者や親の介護をテーマに談義を重ねています。希望もあれば絶望もある喜怒哀楽をないまぜた赤裸々な男性介護者という私を、介護者になって初めて出会ったばかりの他者に「晒し」



ています。介護はおろか家事もできない、時間も体力もない。仕事、家計の不安も無縁ではありません。私を語りそして助けを求めて弱音を吐く、というコミュニケーションは、これまで強い自分の売り込みに専念し社交辞令に終始してきたビジネスマンの交流文化にはなかった場面ではないかと思います。介護が仲介する新しいコミュニティ（ケアコミュニティ）の誕生といってもいいのかもしれませんが。弱さを晒し弱さを受容し互いに讃え合うような交流場面です。多くの市民や援助職のボランティア支援を得ながら、小さなケアメングループが各地に生まれています。この点在するケアメングループのネットワークを如何にして図っていくのか、そしてその組織化の意義はどこにあるのか、このこともまた「ケアメンサミット JAPAN」で問われた論点でありました。

## ②「想定外の介護実態」の広がり

「ケアメンサミット JAPAN」や各地のケアメングループとの交流を通して、「想定外」ともいうべき新しい介護実態がこの社会に広く深く浸透しているのではないかと、思われます。①介護者モデルの変容、②新しい介護ニーズの登場、③あらゆる社会政策への介護問題の波及、④新しい「生き方モデル」としての介護、という4項目が「想定外の介護実態」の指標になると思います。

### 〈介護者モデルの変容〉

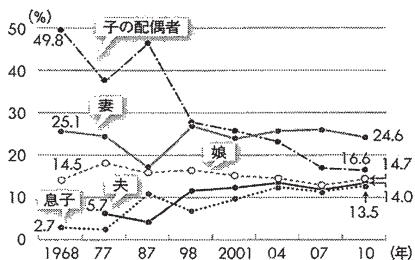
日本で始めて全国規模での介護調査（寝たきり老人実態調査）が行われたのは1968年、公害や都市問題など高度経済成長の矛盾が噴き出し、家族の内部

に深く沈殿していた育児や介護の問題がようやく社会化しつつあった時期です。68年の介護調査では寝たきりなどの被介護者はおよそ20万人と推測され、介護者は子どもの配偶者（ほぼすべてが嫁）が全体の49.8%を占めており、次いで配偶者（ほぼ妻）が25.1%、娘が14.5%、と介護者のうち女性が占める割合はほぼ9割以上を占めていました。「若くて、体力もあり、家事や介護のスキルにも不自由なく、介護に専念できる時間も、介護を引き受けるという強い規範もある」という家族が在宅にしっかりと存在しているという時代のことでした。

この介護者役割の女性モデルは、男は仕事、家庭は女性というジェンダー規範の結果でもあり、同時に家族のリスクマネジメントの結果をも意味していました。家族の介護が必要となった時に誰が主たる介護の役割を引き受けるか。そのことによって最も介護リスクを最小限に押し留めることが可能な家族は誰か、という介護者役割の選択性という機能が作動し、主たる介護者として無業者や低賃金労働者としての家族（専業主婦、嫁、妻、娘）が押し出されて、家族の安定を図ってきたのです。

それからほぼ40年。介護者は激変しました。介護者役割の選択性は機能しなくなり、半数を占めていた子どもの配偶者（嫁）は16%にまで減少しています。主たる介護担い手からの嫁の劇的な撤退をその裏側で引き受けてきたのが、夫や息子といった男性であったといえましょう。

増えているのは老老・男性・有業者・家計の大黒柱・遠距離・認認・別居・シングル・兄弟姉妹・孫・甥姪等といういわば在宅介護の備えを欠く「弱い」介護者であるにもかかわらず、現実の介護政策がいまだに拠って立っているのは「嫁・女性」という従来介護者モデル（若くて体力もあり家事・介護スキルも豊富で介護者役割を厭わない介護者）」なのです。2010年に発足した日本ケアラー連盟が、



同居の主たる介護者の続柄別年次推移

出所：1987年までは全国社会福祉協議会調査、1998年以降は国民生活基礎調査（世帯票）。いずれも「その他家族」は除く

介護される人はもちろん介護する人にも社会の支援を可能とする介護者支援の根拠法の制定を提起していますが、このような介護者モデルの変容を背景にしています。同居家族がいるからといって介護万全どころかむしろ共倒れしかねない家族なのです。

#### 〈新しい介護ニーズと社会政策〉

男性介護者だからこそ可視化しえた新しい課題もあります。前項の介護者モデルの変容とも重なりますが、介護は「入浴・排せつ・移動・食事」の課題だけではなく、生活丸ごとの課題に連関し、介護問題として炙りだしていきます。炊事・掃除・洗濯・買い物といった家事の課題もあれば、介護が始まれば収入は激減し逆に支出は増えるという家計にも直結します。親族や友人、知人、地域でのコミュニティとも疎遠になり孤立の問題もあります。介護が起点となって生活の基盤そのものを揺るがしかねないという事態に不安が広がっています。

介護と仕事の問題もその一つです。数年前、懸命に働いているのに貧しさから抜け出せない人たちをして「ワーキングプア」という言葉が生まれ、いままた同じ「働く」をテーマとする「ワーキングケアラー」という新たな社会現象が問題化しています。

総務省の平成24年版就業構造基本調査の報告書に驚きました（2013年7月発表）。5年に一度実施される大規模調査ですが、そこにはいま介護しながら働いている勤労者は290万人、うち男性が130万人、女性が160万人。60歳未満が約200万人というショッキングな数字が並んでいます。そして過去1年間（平成23年10月～24年9月）に家族の介護のために離職した人は10万1千人、5年間では48万7千人に上ります。

この社会はこれまで介護や貧しさを、働くということとは全く無縁のように扱ってきたはずですが、真面目に働きさえすればその「リスク」はほぼ回避されたはずですが、ワーキングプアの衝撃は、働くということがいまや貧しさのリスク回避になりえないという非常な現実を、具体性を持って提示したことにあります。働いていないわけではなくむしろ懸命に働きながらも貧しさに喘ぐ若い世代の惨状やブラック企業批判と共に瞬く間に世に広まっていきました。

介護も同様です。介護に専念する人と、家計の大黒柱として就労する人がそれぞれに存在することが家族として当然視されてきました。各自それぞれに家族内の分業があり、豊富な家族資源の合理的な割振りを通して、家族に生ずる「リスク」を何とか最小限に封印してきました。苦しいながらもそのことが逆に家族の結束を補強するシステムとしても機能していたのです。介護者役割を割り振られる側にも割り振る側にもそれ相応の犠牲を強いてはいたがこのシステムが機能している限りにおいて介護と仕事は家族内において統合されてきたと思います。これが私たちの脳裏に刻まれた介護するということと働くということの関係でした。でもこの記憶はもはや常識でも現実でもそして何ら合理的でもなくなったようです。社会に深く浸透している介護と仕事の分裂という重いリアルがあります。

しかし、です。貧しさと違って介護は絶対にリスクであってはならないのだと考えます。「貧困撲滅！」というスローガンは道理も正義もあります。社会的な合意形成も可能かもしれませんが、介護はそうはならないでしょう。「介護をなくそう！」というスローガンが介護「する／される」という介護当事者はもちろん、多くの市民の共感を呼び込むことはあるでしょうか。否。その主張を容認し正当化すればひとり高齢者だけでなく障害のある人や難病や精神を病む人も一様に劣化市民とみなし排除する思想に連結されるからです。だからこそ、仕事と生活の調和（ワークライフバランス）が強調され、「介護退職ゼロ作戦！」という新しい社会運動が立ち上がるのです。在宅、施設を問わず「介護のある

### 介護しながら働いている人

		(千人)							
		総数	40歳未満	40歳～49歳	50歳～54歳	55歳～59歳	60歳～64歳	65歳～69歳	70歳以上
有業者総数		64,420.7	24,601.5	14,640.4	6,363.4	6,141.5	6,120.2	3,201.6	3,352.0
介護している	有業者	2,910.2	319.8	534.2	515.6	619.7	546.7	213.3	160.9
	うち雇用户	2,399.3	296.9	481.5	460.3	528.0	417.4	138.3	76.8
	有業者	1,309.2	143.3	216.6	197.2	276.0	277.5	113.4	85.1
	うち雇用户	1,026.9	129.4	191.1	171.9	225.8	203.2	66.9	38.7
女	有業者	1,601.0	176.5	317.7	318.4	343.7	269.2	99.8	75.8
	うち雇用户	1,372.3	167.4	290.4	288.4	302.2	214.2	71.5	38.2

出所：平成24年度就業構造基本調査（総務省）より

社会」こそ、この社会のスタンダードとなるべき社会モデルです。

#### 〈「新しい生き方モデル」としての介護〉

100万人を超える男性のこうした仕事と介護、暮らしの実態が教えていることは、男性も女性と「同じように」介護しようということではないということです。これまでの女性たちが担ってきたように無制限且つ無償の家族介護労働によってのみ成り立ってきた介護のスタイルとシステムをただなぞっていくだけでは、いまこの社会が抱えている深刻な介護問題はけっして解決しないとします。介護者を生きるという男性の新たな生き方モデルは、この社会の「これまで」と「これから」を画するようなインパクトの大きな創造性豊かな新しい生き方モデルに連なっていくはずです。介護する／されるということを至極当たり前のように社会の五臓六腑に埋め込んでいくという、巨大なプロジェクトにもなり得るのです。「いま・ここ」の葛藤の中にこそ未来に繋がる希望があります。

私たちが提起している「ケアメン」というスローガンも各地で散見されるようになりました。介護を、辛くて大変、出来れば避けたいということではなく、育児や介護など家族のケアに接続可能な生き方・働き方こそ実は人生を豊かにできるのではないかというポジティブメッセージと共に広がっていけば嬉しい限りです。

男性介護ネットもその仕掛け人の一人となった介護者支援と「介護退職ゼロ作戦」という一つ一つの活動の芽出しに確信をもって、引き続き取り組みを強化していこうと思います。



## 2. 「ケアメンサミット JAPAN」の実行体制

事業実施に係る課題の把握、整理、検討及び事業の進捗管理を行うために、男性介護者と支援者の全国ネットワークの運営委員を中心に下記の実行委員と各地の連携団体の体制を組織して事業推進にあたってきました。

### ①委員の構成

- ・委員長：荒川不二夫（本会代表）
- ・委員：津止正敏（本会事務局長・大学委教員）・望月裕子（本会副代表・ケアマネジャー）・鎌田松代（本会副代表・福祉施設管理者）・内山順夫（本会副代表・社協職員）・鈴木訪子（本会運営委員・社協職員）・宗利勝之（本会運営委員・福祉施設職員）・松村美枝子（本会運営委員・看護師）・手島洋（本会運営委員・大学教員）・斎藤真緒（本会運営委員・大学教員）・福田遊（本会運営委員・社協職員）・熊谷紀良（本会運営委員・社協職員）・西野玲子（本会監事）・西山良孝（本会監事・NPO 理事長）、

### ②連携団体とその役割

- ・荒川男性介護者の会(東京):サミット広報及び代表の派遣。東京でのプレイベントの開催に協力する。
- ・男性介護ネット甲信越ブロック(事

#### 〈私たちのメッセージ〉

全国 100 万人の男性介護者に、いま・ここに介護を生きる仲間として連帯のメッセージを送ります。

1. かたろう！男の介護
2. つたえよう！私の介護体験
3. ひろげよう！介護の仲間と集い
4. かえよう！介護保険と介護休業
5. なくそう！介護退職と介護事件

私たちは「介護の日」を記念し、この5つのスローガンを掲げて「ケアメンサミット JAPAN」を開催しました。介護によって仕事が断念され暮らしが破壊されることなく、その両立を目指す取り組みを、私たちの重要なミッション（使命）と確認しました。「介護退職ゼロ」の雇用環境と、「介護する人・される人」を社会で支える包括的な介護支援制度、の実現です。介護される人の幸せも介護者の幸せも共に尊重される社会でなければなりません。今回の「ケアメンサミット JAPAN」をその第1歩として、私たちのミッション（使命）を全国に広げていくことを宣言し、〈私たちのメッセージ〉とします。

錦秋の京都から

2013年11月17日

男性介護者と支援者の全国ネットワーク・ケアメン☆サミット JAPAN 参加者一同

務局シルバーバック)：サミット広報及び代表の派遣。長野でのプレインベント開催を担う。

- ・男性介護ネット九州ブロック：サミット広報及び代表の派遣。九州（福岡）でのプレインベント開催を担う。
- ・男性介護ネット北陸ブロック（連絡先みやび、富山県）：サミット広報及び代表の派遣。
- ・男性介護研究会（京都、立命館大学）：サミット広報及び代表の派遣。ケアメングループの実態調査。・男性介護者を支援する会（京都）：サミット広報及び代表の派遣。全国の参加者の接遇。
- ・男性介護者支援ネットワークひょうご（兵庫）：サミット広報及び代表の派遣
- ・北海道男性介護者の集い（札幌）：サミット広報及び代表の派遣

なお、連携ということでは、上記以外にも男性介護者と支援者の全国ネットワークに関係する団体・個人から情報や資料委提供、イベントへの参加など多大な支援があったことを記しておきます。

### 3. 「ケアメンサミット JAPAN」のプログラム

上記の背景と目的をもって開催された「ケアメンサミット JAPAN」の概要を記します。「ケアメンサミット JAPAN」は、参加状況を勘案して当初の計画（2013年11月）を変更し、2013年11月16～17日と2014年3月8日～9日との2回に分けて開催しました。WAMの助成金によって、旅費と宿泊費用を用意しての招待という費用負担の軽減もあり遠隔地からの参加団体も多数ありました。

私たちは「本会が掌握する各地のケアメン・グループ（男性介護者組織）は50を超える関係者に呼び掛けて、我が国初めての「ケアメンサミット JAPAN」を実施する事業である」と助成申請書に記載したのですが、今回の助成事業推進のなかで、当初予測の倍にも上る100か所のケアメングループが把握できたことは驚きでした。その後も情報提供等の交流が可能となっていますが、このグループリストは別稿の資料（2分冊）に掲載しています。このうち46グループが今回の「ケアメンサミット JAPAN I・II」の両方あるいはいずれかに参加し、新しいネットワークの基礎づくりができたとの実感を得ることが出来ました。この46グループの取り組みが各地に広がってさらに大きなネットワークに発展していくことを切に期待しています。

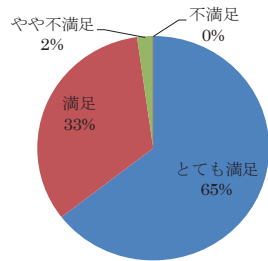
男性介護ネットとして、これまで組織的な関係を持つことはおろかその活動を把握することすら出来ずにいた団体関係者からの参加もあり、文字通り初めての全国的な規模での交流会となりました。評価アンケートには「団体と交流が出来た」「課題を共有した」「運営や交流の工夫や知恵を学んだ」「継続して開催して欲しい」等々という声が多数あがり、圧倒的に支持されたように思います。2013年11月に開催した「ケアメンサミット JAPAN I」参加者で、前頁に掲載した〈私たちのメッセージ〉を採択し共有したこともこのサミットでの大きな成果でありました。このメッセージの中に介護する男性と在宅での介護者の課題がすべて集約されていると自負しているところです。

#### ①「ケアメン☆サミット JAPAN Iー介護退職ゼロ作戦！フォーラム 2013ー」

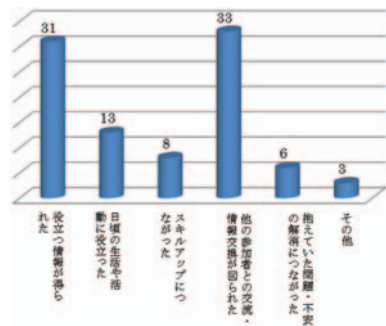
この取り組みは「全国のケアメン・グループの知恵と経験を交流して、全国

各地にケアメン・グループとその活動を広げるための啓発を行い、男性介護者及び家族介護者への支援方策の開発に寄与し、男性介護者の課題に関する一大啓発イベントとする」ことを目的に開催しました。チラシやポスターの作成や、マスコミにも積極的にリリースすることによって、男性介護者の課題に関する一大啓発イベントとなりました。ご案内した100団体のうち、34団体の参加があり、意見交換会やグループワークでは認知度を高めるための工夫や会員募集の方法、役に立つプログラムの開発、グループマネジメントの方法などこれまでの経験の疲労やいま直面している困難な課題などについて熱心に議論を重ねることが出来ました。

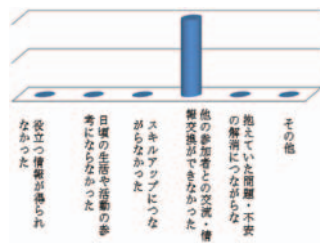
参加者の満足度も高く、右表は11月17日（日）開催のプログラム「ケアメングループ代表者会議（グループワーク、現状と課題）」の参加者アンケート結果では、「とても満足」65%、「満足」33%と合わせると98%にも上ります。満足とする中身は「他の参加者との交流・情報交換が図られた」に尽きるようで、不満なこともまた「他の参加者との交流・情報交換が図られた」にあるというアンケート結果からすれば、徹底した交流・情報交換のプログラムの拡充と工夫こそがニーズであることを示しています。アンケート自由記述欄には「毎年実施を希望します」「方法には異なりがあっても、志は皆同じだと感じる」「日本が抱える



グループ代表者交流会について



どのような点が良かったか  
(複数回答)



どのような点が良くなかったか  
(複数回答)

課題がリアルに情報交換できた。地域により実情が異なること」「次回はこの情報交換会に多くの時間をとってもらいたい」等々強い支持と共感の声が溢れています。アンケート結果の全体詳細は巻末の資料1に開催してありますので、ぜひ参照してください。

〈プログラム〉

日時：2013年11月16日（土）～17日（日）

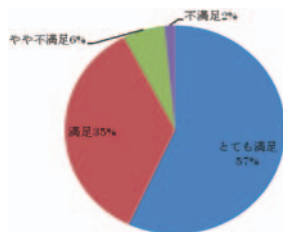
場所：コープイン京都（11月16日（土））、

京都府立総合福祉会館（11月17日（日））

- (1) 11月16日17時～18時30分：ケアメングループ意見交換会
- (2) 11月16日（土）19時～21時：ケアメングループ懇親会
- (3) 11月17日（日）11時～12時：ケアメングループ代表者会議（グループワーク、現状と課題）
- (4) 11月17日（日）13時～16時：「介護退職ゼロ作戦！フォーラム2013」  
\*基調講演「男性介護ラッシュが職場を変える！」渥美由喜氏  
\*リレートーク「私の介護と仕事」5人の報告
- (5) 参加団体数：34団体  
参加者数：2日間述べ約250人

## ②「ケアメン☆サミット JAPAN II－男性介護ネット5周年記念事業－」

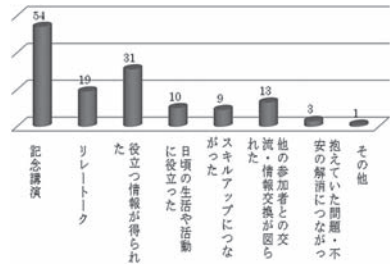
2014年3月には2013年11月に引き続いてのサミットを開催しました。特に今回は、男性介護ネット5周年事業とタイアップしての記念すべき取り組みとなりました。ケアメングループの調査に活用したプロフィールシートに基づいて全国の「ケアメン・グループ」の活動実態や課題について報告し、知恵と経験を交流して、全国各地に「ケアメン・グループ」とその活動を広げるための啓発としました。3月8日にはシンポジウムとして「男性支援の可能性」を開催し、いまなぜ男性支援か、



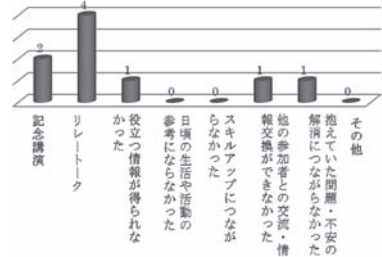
男性介護ネット5周年  
記念事業について

を男性学第1人者の伊藤公雄氏の基調講演をもとに議論を深めてみました。また翌9日には樋口恵子氏を迎えこれからの男性介護の課題を整理し今後の展望を語って頂きました。

右表は3月9日(日)開催のプログラム「基調講演とリレートーク」の参加者アンケート結果ですが、「とても満足」が57%、「満足」が35%と圧倒的な支持を得ています。介護する男性への支援方策の開発に寄与し、介護の課題に関する一大啓発イベントとなりました。チラシ、ポスター及びマスコミリリース等によって宣伝したことも大きく貢献したものと思います。



どのような点が良かったか  
(複数回答)



どのような点が良くなかったか  
(複数回答)

〈プログラム〉

日時:2014年3月8日(土)～9日(日)

1) 2014年3月8日(土) 13時～16時半@キャンパスプラザ京都5階第1講義室

\*男性介護研究会シンポジウム「男性支援の可能性-世代をこえた連帯の地平」

育児、介護、地域活動の分野で、主に男性支援に取り組む活動主宰者からのレポートを基に、「今なぜ男性支援なのか」を男性学の第一人者である伊藤公雄氏の基調講演とコーディネートで明らかにするシンポジウムを開催した。



\*基調講演（13時～14時）「いま なぜ男性支援か」

伊藤公雄氏（京都大学大学院教授、ジェンダー論）

\*シンポジウム（14時～16時半）

ファザーリング・ジャパン関西、おおつ男性会議、京都における男性電話相談、介護する男性支援（住吉ほっこりサロン）、コーディネーター伊藤公雄氏

- 2) 2014年3月8日（土）17時～18時@キャンパスプラザ京都5階第1講義室  
男性介護者交流会・ケアメングループ交流会
- 3) 2014年3月8日（土）18:30～21:00 @京都タワーホテル6階宴会室  
男性介護ネット5周年前夜祭「懇親・交流会」
- 4) 2014年3月9日（日）9時～10時半@キャンパスプラザ京都5階第3講義室  
男性介護ネット運営委員会
- 5) 2014年3月9日（日）10時半～12時@キャンパスプラザ京都4階第3講義室  
男性介護ネット第6回総会
- 6) 2014年3月10日（日）13時～15時半@キャンパスプラザ京都3階第3講義室  
男性介護ネット5周年記念式典

\*基調講演「ケアメンのこれから」樋口恵子氏（高齢社会をよくする女性の会理事長）

\*5周年振り返り&リレートーク

- 7) 参加団体数：42団体  
参加者数：2日間述べ約250人

### ③「プレ・ケアメンサミット JAPAN」企画

- 1) 男性介護ネット第3回九州ブロック交流会：2013年10月20日（日）福岡市
- 2) 長野・甲信越ブロック交流会：2013年10月26日（土）長野県上田市
- 3) 「介護者支援で繋がろう」東京都ボランティア・市民活動センター：2014年1月18日（土）東京都新宿区

#### 4. ケアメングループの活動実態—プロフィールシートから—

今回の大事な事業目的の一つに全国に広がっている「ケアメングループ」の実態把握の調査事業がありました。この調査は、どこにどのくらいのグループがあって、どのような取り組み（プログラム）を行っているか、その活動を広げ発展させていくために求められていることは何か、等々の実態と課題を明らかにしつつ、交流とネットワークを図っていくことを目的にして、2013年10月から2014年2月にかけて男性介護研究会（立命館大学人間科学研究所）と共同で実施したものです。以下、この調査で回収してきた「プロフィールシート」をもとにその実態に一旦を記してみたいと思います。

##### ①ケアメンサミット参加団体のプロフィール

「ケアメンサミット JAPAN I・II」に対してプロフィールシートの提供を頂いた団体は40団体、この中には研究団体や行政機関が2団体含まれています。

まず、活動地区をみていくと、北海道・東北が3団体、関東8団体、甲信越2団体、東海・北陸6団体、近畿10団体、中国・四国7団体、そして九州が4団体ありました。

設立時期は、「認知症の人と家族の会福岡県支部」が1982年と最も古く、最も新しいのは2013年の3月の「男性介護者のつどい」（福井県）です。2010年から2013年の間に19団体が設立されており、2010年代に入ってから急激に増えています。

設立のきっかけは、個人が呼びかけたケースが10団体と最も多く、地域包括支援センターの呼びかけが3団体、デイサービスなどの家族の会の中から始まったところが3団体あるほか、認知症の人と家族の会の中から始まったところ、保健所のワーカーの呼び





かけ、民生委員有志の呼びかけ、社会福祉協議会の「介護者のつどい」をきっかけに集まったところもあり、男性介護ネット事務局長の講演がきっかけというところも2団体あります。

個人が呼びかけたケースは、ご自身が介護の経験をされ、男性介護者への支援の必要性を感じられたことが設立の動機となっています。

会員数は、20人以下の団体が13団体あり、20人～100人未満が8団体あり、男性に限定せずに集まっておられるところは100人を超えている団体もあります。会員制ではなく、その都度参加する形式を採っているところが2団体あります。「いつでも自由に参加できる」という敷居の低さを大切にしているようです。

どのような人が参加されているかということ、ほとんどの団体に介護当事者だけでなく、介護OB、専門職が関わっています。介護当事者は夫と息子が圧倒的に多いですが、親と孫がそれぞれ1名ずついます。中には介護当事者よりも介護OBの方が多い団体もあります。専門職は介護施設職員、介護支援専門員(ケアマネージャー)、保健師、医師、社会福祉士などが関わっています。他にも、認知症当事者、自治会役員や民生委員、市議員との関わりがある他、女性(主婦)も関わっています。

活動内容は、例会、座談会、カフェなど名称は様々ですが、集まって介護のことや日々のことを話しあう形式のものを月1回されているところが16団体あり、月2回されているところも7団体あります。他の活動は、料理教室や介護制度について等の学び、地域のイベント参加などがあります。大きな団体では、相談事業を業務委託されているところもあります。

活動資金は、お茶・お菓子代を開催のたびに100円～200円とされている団体が5団体あります。年会費制のところでは500円から3000円と幅がありますが、「認知症の人と家族の会」の会費に含まれている団体もあります。市や区の社会福祉協議会から助成金を得ているほか、赤い羽根共同募金や個人の寄付がある団体もあります。

協力・連携団体は地域包括支援センターや市町村の福祉課、市や区の社会福祉協議会、認知症の人と家族の会等家族会が多いです。

ここまで、各団体のプロフィールをまとめましたが、ケアメンが集まる団体

の概観が少し見えてきたと思います。

## ②例会の内容

プロフィールシートには「例会の開催日や大まかなプログラム」という記入欄がありました。例会といっても内容は様々あるようです。

座談会、サロン、カフェ、つどい、フリートーク、情報交換など「参加者が語る」形式をされるところが27団体あります。内容で最も多いのは、「特にルールはなく、介護のことを自由に語ってもらおう」というものです。楽しく語り合うことを中心にされています。

次に、「リレートーク形式で一人ずつ語ってもらおう」というもので、これは、一人20分と決まっているところや、決まりはなく、順番に語っていくところもあります。

いずれの形式でも、自分の経験や思いを語る場所があること、介護で大変なのは自分だけではなく仲間がいると確認できることが、団体の存在する重要な意味となっています。「馴染みの顔」があることが継続のカギのようです。

語りの後、「質問はしない、語るだけ」と決めているところもあれば、「語りの後でQ & Aの時間をとる」と決めてところもあります。他には、専門職や「傾聴」を学んだサポーターがファシリテーター（司会、進行）として参加するところや、専門職のアドバイスを受けられるところもあります。

介護経験者の女性がアドバイザーとして参加し、女性の目線で妻の介護者に適切なアドバイスをもらっている団体もあります。女性は同じテーブルにはつかず、後ろの席で聴いており、必要以外は話さないというルールがある、という団体もありました。

語りあう中には情報交換も活発に行われています。福祉用具や介護制度、介護技術についてお互いに教えあう場にもなっています。



語りあう以外のことでは、料理教室や介護食セミナー、専門職からのミニ講座、介護を取り上げたテレビ番組の視聴、エンディングノートなどの学習、勉強会をされています。料理教室を定期的に開催されているところが3団体あります。

不定期でも料理教室を開催されているところが多く、男性介護者が介護そのものと同じように、あるいはそれ以上に悩み、戸惑いながらもチャレンジするのが「料理」ということがわかります。

他の不定期な活動としては、講演会への参加や地域のイベント参加、FM放送での啓発周知活動があります。どうしたら活動を知ってもらい、参加してもらえるのか、皆さん苦心されているようです。ビラや新聞などを刊行されているところが16団体あります。市の広報紙や社会福祉協議会の広報紙に載せてアピールをされているところもあります。

例会でも他の活動でも、参加される当事者が中心となって内容を論議し、決定されていますが、設立のきっかけが地域包括支援センターや保健師、ケアマネジャーの呼びかけであるところでは、内容も呼びかけた側が今のところ決めているが、当事者主体に変えていきたいと考えているとされているところがあります。支援者としてバックアップしたいと考えておられるようです。

例会の開催日時はどうでしょうか。不定期開催のところもありますが、2時間から3時間程度、語りあう団体が多いようです。いくつか挙げてみます。

「毎月第4土曜日 10時から13時」

「毎月第1土曜日 13時から17時」

「偶数月第2火曜日 13時30分から15時30分」

「毎月第1水曜日 13時30分から15時30分」

「毎月第4火曜日 10時30分から15時」

「毎月第2金曜日 12時から15時」

土曜日や平日の日中に開催されているところが多いのは、デイサービスの時間に合わせておられるからでしょうか。集まりにくい人のためにと夜間に開催したものの、初めての人はあまり集まらなかったという声がありました。

開催されている時間であれば、いつ来て、いつ帰ってもいいとされているところもあります。参加のしやすさを考慮されているようです。

③「キャッチコピー」や「スローガン」  
介護や介護支援というと、何かとしんどい、暗いイメージもありますが、それだけではありません。明るく、楽しく介護をしていくことを皆で考えていこうという想いが、キャッチコピーやスローガンに込められています。

「ええかげんな介護を目指して」  
「介護は一人ではない、介護支援も1人ではない」  
「介護苦労は自分だけではない、仲間がいることを知ろう、そして助け合おう」

「ひとりで悩まないで 手をつなごう」

「あなたはひとりじゃない」

「声出して・しゃべって・笑って今日もスツキリ」

「聴こう・語ろう・学ぼう・笑おう・唄おう・飲もう会」

「認知症になって忘れてたり失敗しても Don't Worry ! (気にしないで)」

「認知症になっても安心して暮らせる社会を目指して活動する」

「小規模・地域・当事者現役・自立自律・ざっくばらん」

「駆け込み寺」「あなた教える人、私教わる人ではなく、だれが生徒か先生か、みんなが生徒で先生よ」

「ほちほちやったらええやん」

「外へ出よう、人と話をしよう」

「介護者の会も孤立してはいけない」

「介護者に笑顔がなければ、介護を受ける人は絶対に幸せになれない」

「笑顔で介護仲間と共に」

「男性介護者が孤立しない、悩みを抱え込まない、多くの仲間をつくる」

「介護生活には笑いが必要だ」

伊丹市男性介護者の会きたいの会  
5つの心得

- ①健康第一！健康を大切にし、楽しむことも覚えよう。
- ②介護で悩んでいるのは自分だけではないことを忘れず、自分だけでできないことは頼る勇気を持つとう。
- ③見栄やプライドは捨て、言いたいことを話し合おう！
- ④聞いた話には意見せず、聞きっぱなしに努めよう
- ⑤聞いた話は外に漏らさず、胸に留めよう。

「介護者は孤立してはいけない」

「癒しを大切に（本人にも介護者にも）」

どうでしょうか。このようなわかりやすいキャッチコピーやスローガンがあると、会の雰囲気や活動がわかりやすく伝わるような気がします。周知宣伝する際に、アピールしやすくなるのではないのでしょうか。明るく、力強い言葉が並んでいます。

#### ④今後の活動について

「気兼ねなく、遠慮なく、ケアラーズが本音を語って「今夕からの元気をもらった」という気持ちでお帰りいただければ、他に何も望まないというレベルを維持したいと考えています」というところもありますが、そういった、「当事者が語ること」を大切にしながら、今後の展開をいろいろと考えておられるところもあります。

参加者が多いところでは、それぞれが語る時間を確保するために、地域で分けるなどして、人数を増やさないように工夫したいと考えておられます。逆に、参加者をどうやって増やしていくかに悩んでおられる団体もあります。多すぎても少なすぎても課題のある、繋がりを作ることの難しさが表れています。20人以下の団体が13団体ありましたので、20人前後が集まりやすく話しやすいのかもしれませんが。

カフェやランチ、夜の飲み会など、楽しんで参加できる内容を検討されているところが複数ありました。食べること、飲むことは、語ることとセットで楽しめる内容ですし、既に取り組んでおられるところも多くありますが、今後も増えていきそうです。

活動内容の広がりをお考えおられるところでは、若年性認知症の当事者、介護者への働きかけを挙げられています。（既に支援されている団体もあります）

例会や交流会に参加できない、孤立している男性介護者への支援をしていきたいとされている団体も多く、参加の呼びかけを広く行うことはもちろん、戸別訪問をしたいと考えておられるところがあります。これも既に行っている団体がありますので、方法や手段の情報交換ができるのではないのでしょうか。

例会などの集まる場の他、メールやFAXを利用し、個別の相談体制の構築

を考えておられるところもあります。インターネットの利用を挙げておられるところもあります。

男性介護者だけではなく、「単身者のつどい」や、シングル女性の介護者の支援なども挙げられています。当事者や介護OB、地域の方、独居の方なども共に集まる場を考えておられるところもあります。



そして、男性介護者の現状、介護の現状を関係機関や社会にも広く伝えていきたい、制度や法律などへの要求もしていきたいとされているところが10団体以上あります。

「介護のストレスを発散する場所としてだけでなく、社会に問題提起してアピールしていけるような団体にしていきたい」

「日本ケアラー連盟の介護支援法（案）の具現化」

「企業や行政に介護離職を一緒に考えてもらうこと」

「認知症になっても生まれ、育った地域で安心して暮らし続けられる『まちづくり』を目指していく」

「『徘徊がノー』ではなく、『安心して徘徊できるまち』をつくりたい」

「若年性認知症の人が利用できる福祉施設の開設を行政などに働きかけを行いたい」

これらは今すぐ実現するとされているわけではありませんが、現在の活動だけではなく、未来を見据えて今後の展開を考えておられます。

それぞれの団体をより良くするために、他の団体の活動の様子、内容が知りたいと、多くの団体関係者が訴えています。今回の「ケアメンサミット JAPAN」のような全国から集まる取り組みは、より幅広い情報交換の場になるのではないのでしょうか。

活動地域、活動内容はさまざまですが、プロフィールシートをみていただけ

でも男性介護者の現状、介護の現状を社会に発信する大きな力があると確信しました。「悩み」「苦しみ」といった言葉以上に「明るく」「ひとりじゃない」「笑う」「語ろう」「集まろう」といった言葉がたくさん並んでおり、それらひとつひとつが「力」になると思います。

## 5. ケアメングループ組織化の意義—プログラム開発とケアコミュニティ—

「ケアメンサミット JAPAN」での各プログラムにおいて参加者からも再三強調されてきたように、男性介護ネット発足以降のこの5年間、特筆すべきことは「ケアメン・プログラム」ともいふべき新しい実践手法が開発され広がっていることだと思います。男性介護ネットではこれらのプログラムの推進と普及を「ケアメン・プロジェクト」と称して介護する男性・ケアメンも生きられる新しい介護社会の実現をアピールしてきました。最後に各プログラムの推進を通してなされるケアメングループの組織化（ネットワークづくり）の意義について記し、今回の「ケアメンサミット JAPAN」の総括としたいと思います。

### ①ケアメングループのプログラム

#### 〈ケアコミュニティ（集い場）づくり〉

各地に男性介護者の小さな会や集いが生まれています。今年度私たちが男性介護ネット5周年を記念して実施した「ケアメンサミット JAPAN」で行った調査だけでも全国100を超える団体・機関でこうした事業活動に取り組んでいることが確認されました。このケアメングループから提供された「プロフィールシート」からも以下のような特徴がありました。プロフィールシートの一覧は資料冊子として発行し、その分析内容は本報告「4」にて詳しく記してありますのでご参照ください。

- ケアメングループの主宰者・発案者も、①介護当事者、②専門職・支援者、③専門機関（行政、社会福祉協議会、地域包括支援センター、男女共同参画センター、高齢者介護施設）、④当事者団体（高齢者・介護者団体、難病患者・家族団体、精神障害者・家族会）、⑤NPO、と実に多様です。その会や集いの目的も、①





介護殺人・虐待等介護事件の予防・防止、②介護者の仲間づくり、③男性支援のプログラム、④個別生活支援、⑤介護者運動、⑥介護スキルの向上、⑦研究対象（調査、参与観察、フィールドワーク）、等々これもまた主催団体の数以上に多彩なものとなっています。ただ、この実際の効用は、本稿でも紹介していますが、①同じ立場（介護者及び男性）の人との出会い交流の場、②プラス、マイナスも含めた介護感情が吐露できる場、③「ひとりじゃない」ということを実感する場、④これまでの介護生活の振り返り（reflection）の場、⑤介護者の経験が「知」として生きる場、⑥それ故、介護者同士が教えたり教わったりという相互に学び合う場、⑦介護者と支援者の協働の力が働く場、⑧介護者の元気エンパワメント（empowerment）を引き出す場、等々として圧倒的に支持されています。介護が媒介する新しいコミュニティともいうような共に介護を生きる男性同士の交流交歓がもたらす共感と承認の深まりという相互作用のダイナミズムにその真髄があるようです。

#### 〈「語る／聴く」プログラム〉

「3年前男性介護ネットが生まれ／男性介護者が語り始めた」－これは私たち男性介護ネットの3周年記念式典に樋口恵子先生から頂いた「介護退職ゼロ作戦」と題したメッセージの書き出しです。本当に全国各地で自らの介護体験を積極的に語る男性たちが増えています。小さな集いで他の人の語りにじっと耳を傾け、自己の喜怒哀楽をなймаぜた介護を語る男性たちです。また、男性介護ネットでは恒例になったリレートークのように、社協や行政、地域包括支援センター、男女共同参画センター、NPO等々が主催する介護の日のイベントや介護講習でも、新聞やテレビなどメディアの報道でも語る人がいて聴く（観る）人がいるプログラムもかつてなく広がっています。以前にはなかった社会現象だと思えます。私たちはこうした語り部の組織化を目指して「ケアラーズバンク」なるものを提起したこともありましたが、個人情報運用マネジメントの難しさもあって、本格稼働するには至っていません。事務局が知りうる限りの情報という制約の範囲で、社会的要請に応じていますが、全国100万人を超える男性介護者の語りを組織し社会に向けて発信することが可能となれば介護を巡る環境変革の大きな動力になると思われれます。引き続き具体化の可能性

にチャレンジしていくことが大切です。

#### 〈「書く／読む」プログラム〉

介護体験を「書く／読む」プログラムの代表格、介護体験記『男性介護者 100万人へのメッセージ』はすでに5冊目の発行を数えています。これまでの体験記の収録数は、5集合わせれば560人、介護関係でみれば、妻を介護する人354人、親を介護する人166人、複数及び兄弟姉妹、叔父叔母等その他の家族関係が40人。介護する女性も含めれば本当に介護する人とされる人の関係性は従前に比べても実に多様になり複雑になりました。作家の柳田邦男さんは「書く」ということは生きる支えにもなるともいっていますが、同様のことは体験記を寄せる介護者も異口同音に記しています。書いて介護を生きるエネルギーを獲得するという点では介護ストレスへの対処プログラムともなっています。私たちの介護体験記『男性介護者 100万人へのメッセージ』発行事業は、ひとまず第5集を持って休刊して充電期間としますが、体験記の募集と発表はHPや男性介護ネット通信への掲載など形態を変えて継続したいと思います。そして充電満了の時が来れば満を持して再刊したいと思います。

#### 〈介護者運動プログラム〉

私たちの男性介護ネットは交流とネットワークを介して介護する男性の孤立を防ぎその課題を世に問うという介護者運動の機能を持って発足しました。上記で示したような全国100か所を超える集いの場の存在や「書く／読む」「語る／聴く」など各プログラムの推進、ネットワークの広がりという、男性介護ネットの存在そのものが私たちの主張、異議申し立てであり、政策提言や「新しい生き方モデル」の提起であります。また、2012年から始まった「介護退職ゼロ作戦！」や今回の「ケアメンサミット JAPAN」のような新しい運動課題や方法も、幸いネットワークを広げ社会的合意の水準を高めていくための運動の一環として関係者には好感を持って受け止められています。

2015年の介護保険見直し方向が出されていますが、見直しの度に窮屈になっていくことに介護者と市民の大きな怒りと不安の声が渦巻いています。介護が始まれば「入浴・排泄・移動・食事」という介護行為だけでなく、地域包括ケ

アがいうような24時間365日の「医療・介護・介護予防・生活支援・住まい」はもちろん、介護する人の仕事・家計・孤立など介護・福祉あるいは要介護者本人支援という、既存の分野・領域を越境してあらゆる社会政策に関わる生活上の課題が浮上してきます。

### 2010～2013年度の会員在籍者

都道府県	10	11	12	13	延べ	都道府県	10	11	12	13	延べ	都道府県	10	11	12	13	延べ
北海道	42	46	39	37	54	石川県	4	4	8	8	10	岡山県	12	13	14	14	15
青森県	2	2	5	6	6	福井県	2	2	3	2	3	広島県	12	18	17	18	21
岩手県	4	5	6	7	7	山梨県	1	2	5	5	5	山口県	7	5	4	4	7
宮城県	1	3	3	3	3	長野県	12	13	15	15	16	徳島県	3	2	2	2	2
秋田県	4	4	2	2	4	岐阜県	5	5	6	8	8	香川県	2	2	4	5	5
山形県	1	1	1	1	1	静岡県	8	9	10	9	10	愛媛県	9	11	9	7	11
福島県	4	5	6	6	6	愛知県	8	8	9	13	15	高知県	1	1	1	1	1
茨城県	6	5	3	3	6	三重県	9	9	9	9	11	福岡県	17	24	29	31	32
栃木県	6	6	8	9	9	滋賀県	22	22	22	22	26	佐賀県	3	4	4	4	4
群馬県	1	1	1	2	2	京都府	70	78	79	84	96	長崎県	2	3	4	5	5
埼玉県	27	28	30	28	34	大阪府	65	73	70	69	83	熊本県	2	6	9	10	10
千葉県	26	31	36	36	39	兵庫県	39	42	44	43	51	大分県	3	6	6	6	7
東京都	54	61	58	64	78	奈良県	11	10	10	10	11	宮崎県	4	5	5	4	5
神奈川県	30	31	30	27	38	和歌山県	2	3	4	3	3	鹿児島県	2	3	2	2	3
新潟県	6	5	6	6	9	鳥取県	3	4	20	20	20	沖縄県	0	0	1	2	2
富山県	3	5	4	5	7	島根県	2	2	2	2	3	韓国	1	1	1	1	1
												計	560	629	667	680	805

介護者運動がもっと大きな社会運動に接続されていく客観的な背景がここにあるのですが、私たち男性介護ネットの小さな取り組みもこうした文脈に置き直すことで、独り善がりのものではなく地に足をつけたより一層の広がりと輝きを増すように思います。

社会運動とは労働組合などのような大きな組織が行う要求を掲げ、拳を高く振りかざし、街頭で署名や宣伝、示威行動、立法府・行政府に向けてはロビー活動を繰り返すというものだけではありません。存在することそのものが社

会への異議申し立てという運動機能を有しているものもあります。男性介護ネットのリーフレットのコピー「ひとりじゃない！生きる勇気がわいてきた」という小さな連帯も社会運動の原動力です。前頁の表は男性介護ネットの都道府県ごとの会員分布ですが、私たちのような地域に一人二人という小さな組織でも取り組み可能な、介護者の参加が促進され、そして社会的広がりのある運動レパトリーの開発と推進が課題です。点在する小さな活動を繋ぐという今回の「ケアメンサミットJAPAN」の経験が示唆しているように、あらゆる形態の「ネットワーク」づくりこそがキーワードとなるようです。

## ②ケアメン・プログラムの機能

こうした男性介護ネットが推進しまた開発してきた活動プログラムは、すでに幾つかふれてきたようにその内部に関与する人を励まし勇気づけ気付きを促す次のような自己教育機能を内包し育んできたとも言えます。こうした機能を有しているからこそ会員はじめ多くの関係者に支持され広がっていったものと思います。

### 〔振り返り〕と〔見通し〕の機能

「介護は辛くて大変、でもそればかりではない」。介護は健康な時には蔑にして気付くことさえもなかったような日常些細な関係を可視化します。これまでの暮らしで築かれた関係の揺らぎがはじまり新しい気付きの動力が立ち上がります。私たち男性介護ネットの3周年記念式典でご講演頂いた故長門裕之さんも次のように話していました。「洋子の介護が自分を真人間してくれた」。若いころには随分と無茶もして苦勞ばかり掛けてきたが、認知症になった妻が、自分のどんな些細な上手でもないサポートでも頼りにし喜んでくれることで救われた。若く健康なころには気付きもしなかったささやかだが気遣い支え合う暮らしがこんなにも意味あるものか初めて実感した、というのです。男性介護者の介護体験記には、「恩返し」「罪滅ぼし」「贖罪」等というあたかも自己を鼓舞するかのような内省の言葉が頻繁に登場します。「自分が作った下手な食事も美味しいとってくれる」「トイレ介助の時にお父ちゃんが世界で一番だね、という言葉に励まされる」「就寝の時に妻の微笑みをみる時、救いのように思う」。健康なころには思いもよらなかった感情が湧きあがりほのぼのとし

たしあわせに包まれるというのです。これまでの暮らしの中では気付きようもなかった新しい発見であり、今からでも修復可能な課題でもあります。過去を内省的に振り返りながら新しい関係の中で生き抜いていこうという見通しのエネルギーが先の「恩返し」等という覚悟の言葉となっているのでしょうか。



こうしてみると、介護を生きる人には、介護によって生じる不安や葛藤という揺らぎに寄り添い暮らし方や生き方の新しい発見を後押しする支援と支援者がどうしても必要だといえましょう。振り返りと見通しのエネルギーが自己組織化され、すぐにも行動と思いに表れる人もいれば、胸の奥深くに沈殿し凍てついて立ち上がりには困難な人もいるに違いありません。このエネルギーの立ち上がりには特段に有効に機能するのが同じ立場の人によって語られ書かれた体験であり、それらがライブする交流の場（会や集い）に違いありません。上記で記した「書く／読む」「語る／聴く」という活動は、私たち男性介護ネットの重要な活動プログラムして広がってきたのには、このような有効な機能がその内部に隠されていたのだと思います。

#### 〈新しい「知（経験知）」の発見と創造機能〉

新しい「知」の発見と創造ということは、上記の「語る／聴く」「書く／読む」プログラムの持つもう一つの側面でもあります。さらに進化させていく課題として改めてこのことを強調しておきたいと思います。課題を抱えた人の語りに耳を傾ける行為は介護や子育ての分野でも重視され「傾聴」という支援法の一つにもなっています。語る人との良好な関係を築いたり、その人の精神的安定のサポートに寄与するといえます。が、この間の取り組みの実際や「ケアメンサミット JAPAN」でのワークショップやリレートークでの熱心な意見交換を振り返ってみれば、私たちの「語る／聴く」「書く／読む」というプログラ

ムはこの傾聴という支援法を遥かに超える意味を持っているのではないかと考えるようになりました。相互の関係づくりという傾聴のもつ外形への関心と同時に、傾聴の場において交わされるその「語られた」「書かれた」内容そのものにも特別な意味を見出しているからです。いわば未だこの社会が持ち得ていない新しい「知」の発見があり、「知」の創造が行われる場であるということです。

介護体験記を「辞書の様に手近において繰り返し読もうと思う」と感想を記してくれた方がいました。「医者や学者のいう一般的な話も分かるが胸に落ちない。同じ体験者の書いたものは自分の行先を明るく照らしてくれた」とも記していました。この社会にはもしかすれば真に介護者の知りたい介護の役に立つ辞書の編纂にはまだ成功していないのかもしれないかもしれません。介護者の語りや体験記を素材にして経験知に満ちた新しい介護辞書の編纂過程にあるとすればその社会的意義は計り知れません。高齢者の語りの内容自体を重視し聞いた話を家族や地域に継承しようと民俗学者・六車由美さんが提唱し反響を呼んでいる「介護民俗学」にも同様の視点を感じました。六車さんは、介護される高齢者が語りを通して「教える側」に代わることで生きる意欲を取り戻す、とも指摘し新しい支援の可能性に言及しています（同氏著『驚きの介護民俗学』、毎日新聞2014年2月20日朝刊「『介護民俗学』の取り組み」）。私たちの「語る／聴く」「書く／読む」プログラムが新たに「教え／教わる」も加わって幾つもの異なるエンジンを備えるハイブリッドな知の発見と創造のプログラムとして機能するならば、介護の世界への問題提起も可能となるように思います。

〈本報告書の事業分析は下記の者が担当者しました〉

津止正敏（立命館大学教授、男性介護ネット事務局長）「はじめに」「1」「2」「3」「5」

西田朗子（立命館大学大学院社会学研究科後期課程）「4」「資料1」

(1) ケアメングループ交流会

11月16日(土) 17:00～21:00

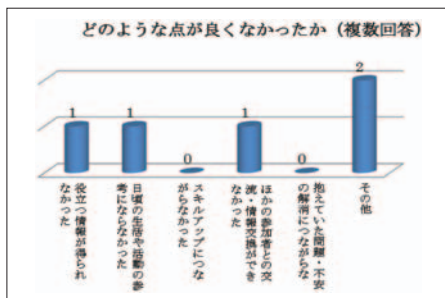
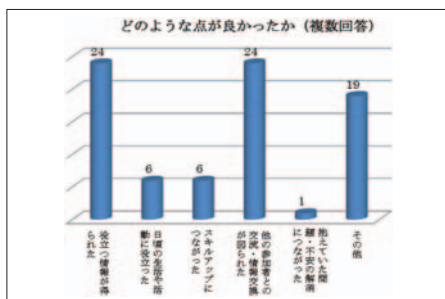
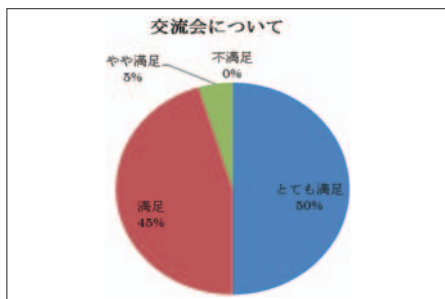
場所：コープイン京都

アンケート回答数：41

「とても満足」「満足」が合わせて95%となり、参加者の満足度の高い充実した交流会であったといえる。

[アンケート記述回答]

- ・立食形式にしたので移動していろいろな人と話せた
- ・生演奏(特に学生という所が良い)が、ちょっと雰囲気を変え、場を和らげてくれる効果はあったと思う
- ・自団体紹介で1分(つまり全体で30分位)は短すぎる。2倍の2分(全体では1時間)ぐらいはほしかった。ちょっとした印象に残るエピソードや、問題点をあげるくらいは言えたのでは。(つまり、その団体の特徴的な話が頭に残らず、書いてあることをサーッとやって終わった印象)



- ・旧知の方と再会でき、旧交を温められたこと
- ・地域色が豊かで、その対応も様々
- ・多くの団体と知り合えてよかった
- ・全国にこれだけの団体があることがわかり、何か元気が出てきました。とても良かったです
- ・全国の情報が知れて大変良かったです。横のネットワークをつなげれば、遠距離での支援につながると思いました
- ・介護の心得のフレーズ紹介面白いですね。つい暗くなるので聞いてよかった
- ・ケアメン必要性に関するアピールが欠けていた
- ・各地の情報が知られ、地域での会づくりの参考にしたい
- ・代表者の表情がとても良かった
- ・筑紫野市の会→男性のみで10月会の運営をしたことが残っている
- ・実際に男性介護者の声を聞いてよかった。今後の活動のモチベーションUPにつながった
- ・日本国中から一同に集まったことに非常に意義があります。これが発展して各県都道府県、市町村にも男性介護の会ができればよいと思います
- ・熱心に活動されている方々に励まされました
- ・役立つ情報が得られるように、今後に期待
- ・他団体の活動状況が非常に参考となり、今後の活動への活力がわいてきた
- ・同じ目的意識を持ったみなさんのお話を聞くことができた
- ・他のグループの活動がよくわかった。こんなにグループがあるのはうれしい
- ・忌憚のない話が聞いてとても良かった
- ・明日11 / 17の交流に期待、時間がない

## (2) 全国のケアメングループ代表者交流会

11月17日（日）10：30～12：00

場所：ハートピア京都

アンケート回答数：45



圧倒的な満足度だが、「良かった点」、「良くなかった点」双方から「他の参加者との交流・情報交換」に対して大きな期待が寄せられていることがわかる。

[アンケート記述回答]

- ・他の活動内容を知れた
- ・笑顔を取り戻せそう
- ・ひきこもっている介護者への呼びかけやアタックの方法をいろいろ聞いた。

5～18歳の介護者の支援を勉強されている人もいてびっくりした

- ・各地区のいろいろな会などを活用して更にPRしていく方法にまだむずかしさが残った。解決にまだ時間が掛かる

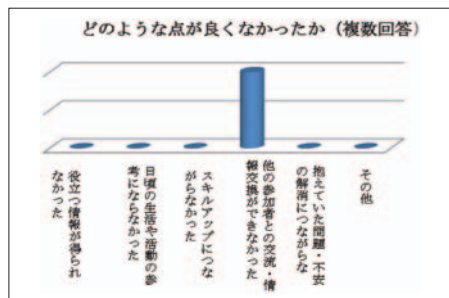
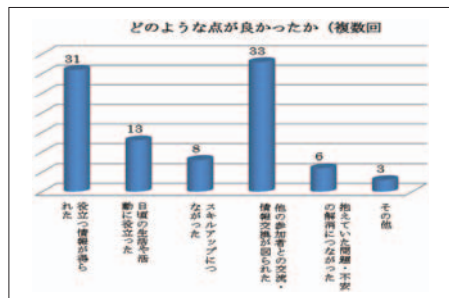
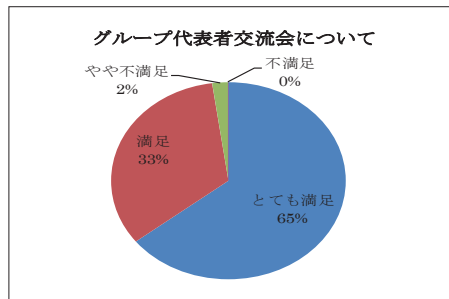
- ・忌憚のない話が聞けた
- ・先進的なお話をたくさん聞くことができました。ここで勉強させて頂いたことを地元を持ち帰って、会の発展・社会の発展のために努力していきたいと思えます

- ・世代の異なる支援の労働環境の問題などについて議論

- ・毎年実施を希望します
- ・方法には異なりがあっても、志は皆同じだと感じる

- ・日本が抱える課題がリアルに情報交換できた。地域により実情が異なること

- ・介護と仕事（就業）の難しさの



現実が伺えた

- ・介護休暇（職）あとの後職の難しさ、実態として、会社の中で必要とされていない状態があったりで復せない
- ・他の団体の進め方が参考になった
- ・少人数なので多くの意見交換ができた。次回はこの情報交換会に多くの時間をとってもらいたい
- ・男性介護者の参加をより多くするにはと言う問題で、イベントを展開するチラシを入れる。新聞などのマスコミを使つてのアピール
- ・情報交換できる。若者が介護に関わらざるを得ない社会になってきている。介護と仕事の課題が広がってきている
- ・ローカルな集いのマンネリを防ぐと思います
- ・とっかかりと、目指す方向は一緒。（自分が介護に苦労したので、今、困っている人を助けたい）でも、方法論はさまざまなことがわかったのでよかったです
- ・どうやって男性介護者の掘り起こしをしていくかについてのテーマでいろいろなアイデアを示してもらった
- ・「筑紫野市介護を考える家族会」の活動報告
- ・自分たちの活動のPRができた
- ・立場別、特に単身介護者の会

### (3) 介護退職ゼロ作戦フォーラム 2013

11月17日（日）13：00～15：00

場所：ハートピア京都

基調講演「男性介護ラッシュが職場を変える」

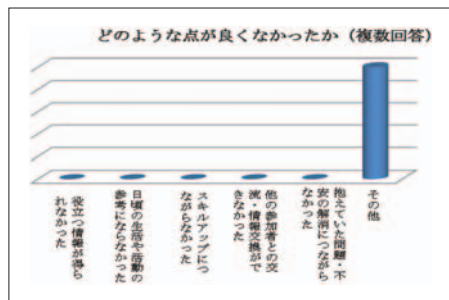
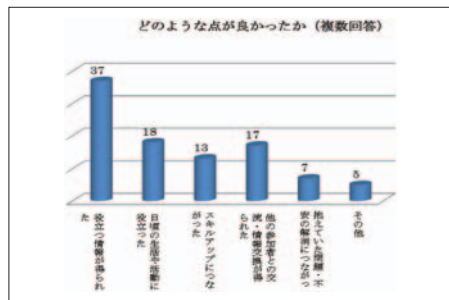
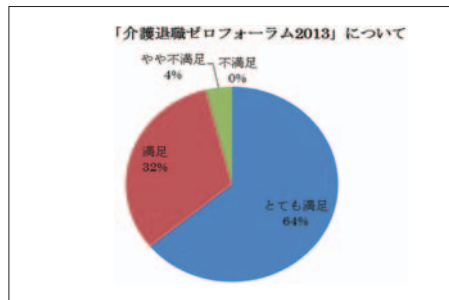
渥美由喜氏（株）東レ経営研究所

リレートーク「私の介護と仕事」

アンケート回答数：50

[アンケート記述回答]

- ・このように考えればよいのだと思った
- ・男性の体験談が聞いてよかったです
- ・素晴らしい講演でした。私の場合も妻が6年前ガンで死去、私が双極性障害で措置入院、毎日何時間も私の所に電話がかかってきた事もあり、身につまされる講演でした。(この間母の介護が乗る)
- ・渥美先生の話が大変参考になった。介護と仕事の両立を今後も支援した
- ・日頃の集いの仲間の状況とはまた違った大変さを具体的に聞くことができ、地域の男性介護者の発掘が急務であることを感じた
- ・いつでもどこへどんな方法でという情報が得られ、大変参考になった
- ・介護者運動が肝要。その取り組みを男性介護ネットが担うべき、介護者支援法の実現
- ・基調講演はとても新鮮で深い学びになりました
- ・リレートークは現実を真に知りとても有意義でした
- ・もう少し時間があつたらよかったです
- ・渥美先生、リレートークの方のお話、それぞれの方のお話も心に残るお話でした



- ・私自身のことですが、老化現象で聴力が低下し、少し早口の講演は半分以上？は聞き取れませんでした
- ・渥美さんのお話に情緒的な要素が多かったのが印象に残った。私は、仕事としてケアマネを行っており、親族の介護に携わっているわけではないのですが松明になりたいと思います。ありがとうございました
- ・自閉症の孫をもつ。先生の生い立ちをお聞きし、今後の育児の方法でいかに成長を楽しんでいくか。そして、介護の心得を知る。辛→幸
- ・生の声、50歳で離職、介護と仕事、絶対できないことの話。悲痛な思いで聞くチャンス
- ・会社が理解あって就業できるのはいいが、心ない仲間の<くいじめ>で会社を去らねばならないことがある等…。
- ・ブロックごとのディスカッションで参加者の交流が深まりネットワークの進化がみられた。全国の新しい団体の参加で新しい知見を得ることができた。渥美先生の講演でカミングアウトする大切さと、上には上がいることが分かった
- ・人としての生き方にとっても感動しました。たくさんの方が勇気づけられたのではないのでしょうか
- ・やや話し方が速かった
- ・発言、発音が不明瞭で聞き取れない箇所多し
- ・抱えていた問題がわかった
- ・女性介護関係から考えることが多かったので、問題点の違いがよくわかった。
- ・物事を前向きに考えることが大切だと思った
- ・渥美先生の講演→自分が8年間の介護でプラス思考になれたと思っていたが更なるプラス思考を教えていただいた
- ・武田さん→人柄がにじみ出て、自分を客観視しながらペースを作られたことに感激です
- ・三橋さん→大変貴重な発明の仕事。違う視点でゆっくりと思います
- ・佐々木さん→しみじみとお母様への思いがわかりました
- ・渡辺さん→認知症と腎臓の病気では大変なこと、仕事さがし、調理でも早く帰りたいんやろうとも誇れる親のために働く、栄養管理もと…がんばって下

さい。長時間労働の人がたくさんいることに心痛む。企業が理解していても現場が無理解なのは日本の常態なのですね

- ・ 永田さん→海外など広い世界まで行動範囲を広げられてすばらしい取り組みでした
- ・ 他地域での活動の姿が見えてきた
- ・ ありがとうございます。私も介護・看護・育児・療育そして仕事を両立させています。考え方、時間の使い方意外と何とかなるもんだなと毎日楽しく過ごすようにしています。介護、療育もビジネスだとなつくづく感じています。ぜひ、時間生産性の向上に関する話を聞きたいと思います
- ・ 当事者の生の声を聞くことができ、大変心に響く内容でした
- ・ 介護の捉え方に対する考えが参考になった
- ・ 渥美さんの話、自分で実践していた点も有り。自信を持ってました
- ・ 具体的なエピソードオンパレードの渥美氏の講演がすばらしかった。根底の人生観・死生観を共有できる人の数は限られているだろうが、本当によいお話を聴くことができ参加した甲斐があった。相手の笑顔につながるかわりのできたのであればまずよしとしようという自分なりのガイドラインが誤りではないような気もした
- ・ 渡辺氏が指摘した弱者切り捨て、中間層下端以下の棄民政策への対処を視野に入れないケアメンサミットとみなされるようなことがあるとすれば、富めるものの自己満的報告会に墮とさない舵取りを切実に願います
- ・ 自分にはたいした経験や体験がなく、人の話からしか問題を考えられないので、いろいろ話を聞けてすごく勉強になりました。交流はやりにくいです
- ・ このようなフォーラムをもっと広げてもらいたい
- ・ いろいろな方のリレートークと、フォーラムでの基調講演もご自身の体験を交え、わかりやすく感動的でした。まだまだわかりにくい制度や在宅介護の実態を多くの人に知ってもらいたいと思います

#### (4) シンポジウム「男性介護の可能性」

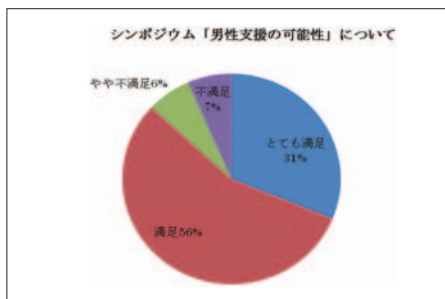
2014年3月8日(土) 13:00～16:30

場所：キャンパスプラザ京都

シンポジウム「男性介護の可能性」

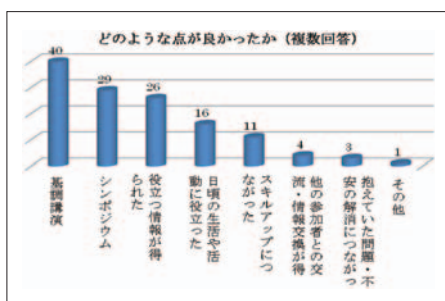
アンケート回答数：60人

「とても満足」31%、「満足」56%と90%近くの支持があった。基調講演に多くの共感が集まった。「役立つ情報」について良かった、良くなかった双方の回答があり、介護者や日頃の活動に真に役立つ情報への渴望があるようだ。

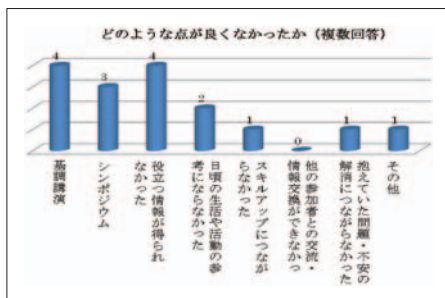


#### [アンケート記述回答]

- ・ジェンダーギャップ指数が105位である理由が日本の経済発展してきた仕組みにある。超高齢者社会を最初に迎える日本は、世界の中で先駆事例になるとの話は興味深かった



- ・男性介護を中核に男性支援に関する様々な分野で活動されている方の話を聞くことができ、広がりがあったよかったです



- ・語らない男性を語らす工夫、ほっこりサロンの取り組み

- ・地域情報がとてもよかった

- ・それぞれの立場の方々から具体

的な話がいくつも出てきてただ自身、会場に入ったのが16時頃だったので十分な話が聞けなかった分が残念でした

- ・関西での男性介護者支援の動きがわかった
- ・男女関係の変遷が知りえた、男性ならではの問題を再認識できた
- ・地域でのさまざまな取り組みを知りえた
- ・基調講演では支店の違う話しが聞けてよかった。親密圏、海外事例など
- ・なぜ男性の場が少ないのか、参加されないのかがわかりました。社会の中で異性として生きてきた人生があった事
- ・伊藤先生のお話は、われわれの実感やイメージをデータとして、学術的に提示してきたと言う点で意義があった。ただ、今後の展望と言う点では弱かった
- ・具体的情報、参考になった
- ・男女の違いがクリアになった
- ・考え方や取り組み方
- ・もう一度何らかの機会にゆっくりと戦線の話は是非聞きたい
- ・介護とはかたゆく考えがちだが、生活の一部、楽しんでやらなければ続かないことを確信した
- ・具体的な事例をあげてのご説明がとてもわかり易かった
- ・男性、女性を問わず、介護多世帯問題を地域でとらえていく多様な支援のモデルを知ることができた
- ・支援ある例としてのヒントか具体的が得られた
- ・介護に男女のちがいは無いが、なぜ男性に対する支援が必要なのか。私自身が男性介護の集いを毎月開いているが、\*精力的な支援が必要\*介護技術のスキルアップ\*日常生活の生活技術力の向上\*更に公共サービスの利用情報が希薄（情報不足）\*地域に溶け込む時の周囲の理解 が今日の中からヒントが得られました
- ・日頃皆さんと話をしている中で思っていたことを理論的に説明されたこと
- ・個人と地域のつながりの不足の改善等、地域連携の確立の実現に向けての活動をしていきたい。行政を含めての取り組み
- ・少子高齢化を実感！！意識の問題だけでは解決しないことを労働も含めて今こそ見直す時が来たのですね。また、男性介護者だけではなく、人とのふれ

あい？

- ・小林さんのできる男の別省に関する話は良かった
- ・内容多かったが、濃く過ぎて、吸収できない部分があった
- ・私たちのしていることは大きな実験であり、後世に伝えていかなければいけない大切なことであると認識しました
- ・基調講義の講師がわかりやすくまとまっていた。内容的には周知された内容ではあったが、データを用い、分析され、課題を再確認できた
- ・いずれにしても地域社会全体を巻き込むには、MANも含めて、まだ時間が必要であると思います。ただ、その先見性には、脱帽いたしました
- ・なぜ「男性」が介護者として特別に取り上げられるのかが具体的な説明があり、かなり明確になったため、今後の活動で何を考えながら行えばよいか役に立った
- ・基調講義：大学教授という専門家がどういう具合に問題を受け止めているか聴く過程で介護の現場にいる非専門家の思いとの違う点が明らかになったこと。  
シンポジウム：語らない男性の像のプレゼンを聞いているうちに（from 今井まゆり氏）語らないのではなく、語れない＝語る自分を把握できてないのだという私の観察とはずいぶん違うということがわかった
- ・男性介護者（OB）のつどいを持つ度に、どのようなデータが得られるかと…
- ・必ず人の話を聞いてこと
- ・心やすらかであることを学べたかな
- ・演者は意図的に他分野から招いたかと思うが、これから男性介護について議論が深まっていくようなイメージがわかかなかった。「男性学」の研究会ならこれでいいかも知れないが、交流会や情報共有、介護者支援に向けたとりくみをしていくほうが有意義と考える
- ・パネルディスカッションの質問のチョイスに疑問があった
- ・介護者本人に良い介護する必要があるのではないかと
- ・介護者本人が置き去りにされているのではないかと
- ・今日の男性介護の主旨に合っている内容だった。しかし、男性、女性の特徴を分析した内容や今後の男性介護の取り組みの参考になった。
- ・第一回の渥美さんの話にくらべて何を伝えたいのか??が伝わりにくく、中



身も、うすく感じました。介護と仕事と社会でのあり方、個人（介護者）の努力、社会（社会風土、法律）の努力について、渥美さんの話しを二回聞くのが良いと思いました。

- ・男性の特徴に関する一般論で、あまり心に響かなかった。男性介護者は既に意識が変わっている。人は生きてきたように老いるのだから、定年まで仕事以外にどのような生き方をしてきたのかが問われる
- ・マイノリティ（少数派）ムーブメント（運動）ジェンダー（男女平等）などの横文字が多く、分かりやすくPRして欲しい。その他は良かったです
- ・男性配偶者介護者の問題点が今まで一度もとりあげられたことがない。事実婚、離婚、内縁関係者のジェンダー介護男性の問題は介護プラス差別、偏見に置かれている
- ・介護とは関係ないテーマであり、他の事業で扱うテーマであった。世帯の連帯や世代を超えた連帯は誰からも語られなかった。指摘も無かった。時間の無駄でした
- ・我々団塊の世代は、それほど社会に向いているとは思えません。ゴルフ、小料展に出向いています。（私の知る限りですが）
- ・小林裕子氏のお話にあったが、「サービスを利用していない男性介護者」への周知についてはそういうサービスがあることを知らないために使わないというケースしか考慮されていないように感じた。現場にどっぷりの私の印象では「サービスがあるのを知っているけど使いたくない」というバリアーをどう壊すかという場合が多いと感じている
- ・虐待について。何が虐待に当たるのか、直面しそうな時、どうすればよいか
- ・地域情報が参考になるので、とても良かったので今後このような催しの時発表されるのを楽しみにしています
- ・介護をめぐる法律問題
- ・シングル介護者への手助け
- ・介護放棄の問題
- ・若い世代の介護者の集いのイベント、語り場、交流会
- ・遠距離介護者の集い
- ・介護休暇のあり方と運用の研究会

- ・学校教育と介護（ないし地域福祉援助）
- ・介護される側の意見、思いも取り入れて欲しい
- ・介護の質の問題を取り上げてください
- ・年に一度このようなサミットを開催して欲しい。男性介護のみならず、男性支援について考える会がなかなかないので是非またやって欲しい
- ・男性介護の会の運営事例、成功例と失敗例、両方知りたいです
- ・各地域で活動されている男性介護者グループによるディスカッションなどをより深く（活動の内容や実態をより深く知りたいため）
- ・介護離職対策×2名
- ・介護者の就労について
- ・渥美さんのような具体的な（現場の）話をもっと企業人から聞いてみたい
- ・一流企業の方だけではなく、中小の方ならではの視点の話も聞いてみたい
- ・ケアメンサミットのために、講演された方が団体代表として、何がどう結びつくから話をしました。というのが良くわからなかった
- ・ケアメンサミットを含めた活動と研究には感謝しています。ワーク・ライフ・バランスに取り組んでいる企業を知ることができればうれしい
- ・男性の深層心理（育児、介護、働き方などについて）、地域連携、ワーク・ライフ・バランス、家事
- ・介護する人、される人。誰でもいずれ、終末期を迎える。どう死にゆくか。これはされまでどう生きるかにつながるので、人生観、死生観が反映される。役に立つ情報とともに役に立たない情報にも目を向ける必要がある。荘子の「無用の用」である
- ・今回参加させていただき本当にありがとうございます。ヒントを沢山持ち帰るだけではなく、ネットワークとして何かできないのかと思います。（資金面でも一緒にできることは理想です。）
- ・男性配偶者介護者の問題点が今まで一度もとりあげられたことがない。事実婚、離婚、内縁関係者のジェンダー介護男性の問題は介護プラス差別、偏見に置かれている。という件についての男性配偶者の問題点
- ・介護うつの問題は介護者の重大問題
- ・「食べてへんのに払うんか」で奮闘された林さんは大きく言えば「男性介護

の社会を変えた」の一事例になると思います。個人ではなく、ネットワークとして介護問題の矛盾を集約して行政に伝え、改善していければ素晴らしいと思います。そういう取り組みはどうでしょうか

- ・介護退職の作戦以外にもと言う意味です
- ・認知症の親とのコミュニケーション
- ・地域社会に出来てない男性が出やすいように「場を設ける」説明があったが、それでも来ない、来られない、場の存在さえ知らない方達が多いため。この解決に具体的に対応して効果のあった事等知りたい

### (5) 男性介護者意見交流会

2014年3月8日（土）17：00～18：00

場所：キャンパスプラザ京都

アンケート回答数：39人

短い時間での交流会となったためか、「日頃の生活や活動の参考にならなかった」「抱えていた問題・不安の解消につながらない」など「やや不満」との回答が13%となったが、それでも「とても満足」「満足」との回答が80%を超え、意味のある意見交流となっていることがわかる。

#### [アンケート記述回答]

- ・全国から一同に色々な交流が出来ることはあらためて感謝します
- ・各地域の男女参画審議会やセンターが取り組んでいることを具体的に知ったこと
- ・政策提言まで考えている団体もあり頼もしい
- ・時間がもう少しあればと感じた
- ・他者の方の発言が地道に努力されている実情がわかりやすかった
- ・参加で出来る場を知ってもらうことが大切、そう広めるかが課題だと思います
- ・皆様がんばっていますし名を丁寧な内容でしっかりお話しておりましたすごい事です

・新しく参加された方々の力ある発表に敬服

・単なる報告で終わった

・終末期の対応・本人の(被介護者)気持ちと介護者の意思の「ソツウ」の事例、高齢化になって施設では対応できないその方向性を示して欲しかった

※皆さんと話していてそのことが痛烈に感じられることです。

・新規参加の紹介は、特長ある内容(時間限られているので)に特化されていると良かった

・もう少し具体的に知りたかった

・各活動団体の特に参考になる(一般的な共通の課題)ごとに特化した事例等を聞ける場所となるとより学習になります

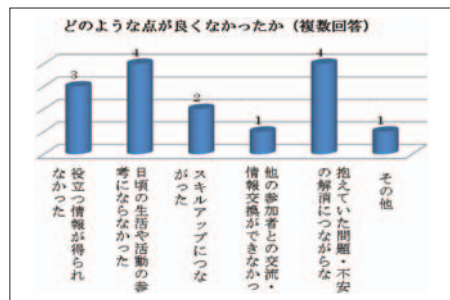
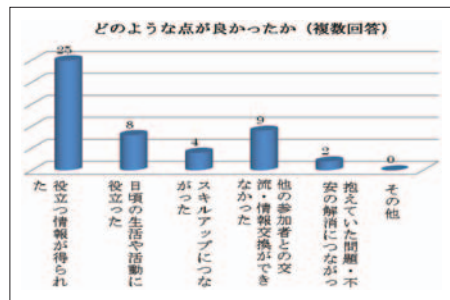
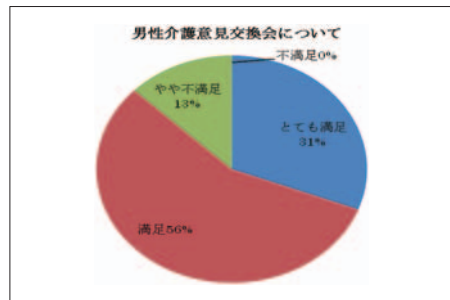
・認知症治療薬の最先端情報

・意見交換会の時間を増やしていただければもっとお話しを聞きたいです

・介護中の体験(一人15分)とともに(介護体験者の)介護を通じて学んだこと、そしてそれを現在の生活にどう生かしているか

・プロフィールシートに感動しました。また、じっくり読ませていただきます

・昼食会又は、ブランチ、3時のお茶会をして欲しい。夕方～夜は、介護のため帰宅しないといけないため



## (6) 5周年記念式典

基調講演「ケアメンのこれから」

樋口恵子氏（NPO 法人高齢社会を良くする女性の会代表）

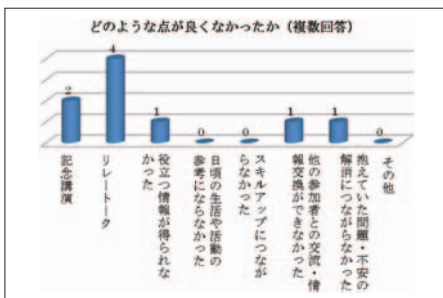
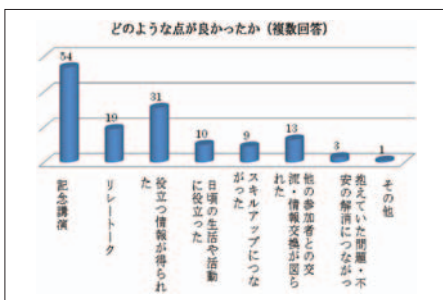
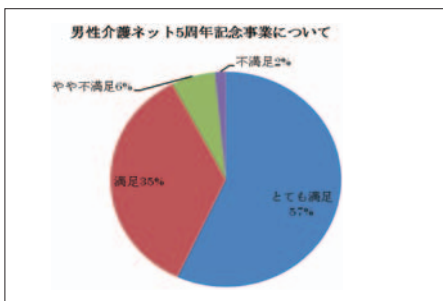
男性介護者リレートーク

アンケート回答数：64人

樋口恵子氏の基調講演に多くの共感の感想が寄せられたが、アンケート結果にはリレートークの時間不足の指摘も感じられる。

### [アンケート記述回答]

- ・具体的な数値をもとに社会現象の変化を課題抽出され、対象についても提言されていて非常によかったです
- ・ワークライフアンドケアはこれからの社会に非常に大切なことであり、日本の社会が救われるのですなかとします。企業にとっても不利益がかいに出来る
- ・歯切れのよい樋口先生の話感銘を受けました
- ・樋口さんは良く知っている（他の機会に）切り口の素晴らしさそのものです
- ・とてもよかったです。少々時間が長すぎませんか？先生にお気の毒です
- ・素晴らしい発展、敬意を示します



- ・時代が変わり、男性もケアをする側になった。先が見えないけれど続けてい  
かないといけない事がわかりました
- ・大役役立つ、または重要な取り組みとと思いました
- ・樋口先生の講演は良かった
- ・これまでの活動の確認になりこれからのやるべきことがはっきりした
- ・樋口先生の講演の中で「イギリスはシチズンシップ、日本はソルジャー」で  
あるなら、日本におけるシチズンすなわち仕事・家庭・地域等に地域の再生  
のつくりをどのように取り組むかが課題。国の行政は最近「地域を」と唱え  
ているが、具体性も無く財政上もない。ただただ介護は家族・地域の問題と  
して位置づけて介護放置しているのがこれらの現状だ
- ・介護についての過去・現在・未来のことが理解できた。男性介護者増加の必  
然性・問題点・対策が浮き彫りになった。未来に希望が持てた
- ・樋口先生のお話が長すぎた。時々他の先生でもいいのでは？
- ・いいお話ですが少し時間が長いかも。集中力が続きません
- ・今後の運営に関する意見交換
- ・参加者が気持ちを一つにして活発な意見を発表する機会があったこと
- ・各方面での現状を知り、大いに参考になりました。特に年齢構成の中での介  
護の姿の大きな変化に驚くかぎりでした
- ・会のこともよかったのですが、実際の介護されている立場でのお話があると  
よいかと思います
- ・樋口先生のお話は簡潔でわかりやすく、ケアメンを支える必要性を強く感じ  
ました
- ・日本の社会が変わってきて、今の介護の課題があることを分かりやすく話し  
ていただいた。「不慮の事故」として出産を届け出た話は、印象的でした。
- ・「ながら介護で行こう」と言う話に共感しました
- ・「くるみん」のように介護に協力的な会社を判別することで、介護退職する  
可能性を低く、個人の選択で出来ることは絶対に良いものになるとと思いま  
した。私も今から、作業療法士を目指し、リハビリと認知症のメンタルケアの  
プロとして存在することで親の介護の痛みと、仕事の両方を調和させるかも  
しれません。もう二度と、介護退職はしたくない

- ・日本の家族の有りようの変化が良くわかった。子を介護者を選ばないけれど、これでよいのか、子を介護者にしたいから介護離職を止めるのでは、ないだろうか。子に期待しないのなら、介護離職ゼロも不必要では。矛盾を感じる
- ・色々な情報が得られた
- ・介護離職ゼロ要望書がよかった
- ・介護と介護が抱える問題への熱意ある発言、同時代を生きる気持ちの共有と連携
- ・個人から団体、様々な取り組みをしていることがネットワークで繋がり、共有できる体制作りを期待しています
- ・活動内容の話も悪くないが介護体験と銘打っている以上はもっと実体験の話が聞きたいと思いました
- ・介護体験というより宣伝みたいであった。期待していた様子ではなかった。ただ最後のほうはよかった
- ・もっと説明なり事例が欲しかった
- ・80歳の高齢で元気でお話ができることに敬意を示します。
- ・つどい等が使用している資料を集めて冊子のようなものを作っていただきたい
- ・介護保険と家族介護モデルを考える
- ・地域の中で関係団体と連携に取り組み等
- ・HPで講演の先生や演習課題を教えて欲しいです。告知
- ・参加者同士の交流サロン
- ・上野千鶴子さんの講演はいかがでしょう。(上野先生は今立命館大学院教授だから最適でしょう)
- ・男性介護者支援の視点など。会を開くときの具体的な内容を全体場で聞いてみたかった。なぜ男性同士なのか、男性同士のメリット・デメリット・特徴。当会は高齢男性のフォローで困っている
- ・介護離職に対する今後の取り組みや、対策をもっと深く知りたい。
- ・介護休暇に理解ある、影響力のある企業経営者の話。樋口先生に今後もお願いしたい。在宅医療・介護について。鎌田實先生の話
- ・「私の体験発表」でプロジェクター等を使って説明してほしい
- ・社会風土が変わるまでの間に個人の努力としてどうやってメンタリティ、論

理で介護を自分の人生に調和させ肯定している、又は悩んだままなのか等が聞けたらうれしい

- ・例 1. 十年の介護に関わって、失った喜びを資産を自分のために使って遊びまくることで取り戻している
- ・例 2. 作業療法士のリハビリとメンタル（認知症）のケアのプロに転職することによって、親の介護を臨床と捉え、仕事も介護もリンクさせることで最大の理解者であり仕事にも集中できるメンタルコントロールをする
- ・例 3. 介護によって失ったエリート学生街道を逆に自分の売りにして不運な要素を個性と捉えメンタルをコントロールする



【資料2】「ケアメンサミット JAPAN I・II」参加団体一覧

地域	出席 (I)	出席 (II)	プロフィール シート	団体名
北海道	○	○	○	北海道男性介護者と支援者のつどい
北海道	○		○	東川町男性介護者の会ほだい樹の会
宮城	○	○	○	認知症の人と家族の会宮城県支部 なごみの会
東京	○	○	○	荒川区男性介護者の会「オヤジの会」
東京		○	○	NPO 法人介護者サポートネットワークセンター・アラジンつくし会
東京			○	かずらの会
東京	○	○	○	認知症ケア町田ネット
東京		○	○	みたか・認知症家族支援の会
東京	○	○	○	介護者のつどい東大和
東京	○	○	○	NPO 法人杉並介護応援団
神奈川	○	○	○	川崎市認知症ネットワーク
山梨	○	○	○	山梨やろうの会
長野	○	○	○	シルバーバックの会
長野		○		長野県男女共同参画センター
静岡	○	○	○	NPO 法人生き生き岳南クラブ ほっと
愛知		○	○	NPO 法人てとりん
愛知			○	名古屋市南区社協
富山	○	○	○	男性介護者の会みやび
福井	○	○	○	ケアホームさいせい「男性介護者の集い」
福井	○	○	○	福井中央北包括支援センター
滋賀	○	○	○	男性介護者の集い「中北の家」
滋賀		○		甲賀市介護者の会男性介護者部会
京都	○	○	○	男性介護者を支援する会 TOMO
京都	○	○	○	男性介護研究会

地域	出席 (Ⅰ)	出席 (Ⅱ)	プロフィール シート	団体名
京都			○	認知症の人と家族の会京都府支部男性 介護者の集い
大阪	○	○	○	住吉区地域包括支援センター ほっこ りサロン
大阪	○	○	○	豊中市老人介護者（家族）の会
大阪	○	○		福島男性介護者の会
大阪		○		妻を介護する男性介護者の会(準備会)
兵庫	○	○	○	ほっこり庵（NPO 法人スマイルウェ イ）
兵庫	○	○	○	たつの市男性介護者の会
兵庫		○		宍粟市男性介護者の会
兵庫	○	○	○	男性介護者の会 ほちぼち野郎
兵庫	○	○	○	伊丹市男性介護者きたいの会
兵庫	○	○		男性介護者支援ネットワークひょうご
岡山		○	○	岡山男性介護者の会
広島	○	○	○	男性介護者の会（福山）
広島	○		○	男性介護者4木（よんもく）の会
広島	○	○	○	広島市佐伯区健康長寿課
広島		○	○	広島市東区ケアメンの会
鳥取		○	○	男性介護者ネットワーク鳥取県
香川	○	○	○	社会福祉法人牧羊会 特別養護老人 ホーム シオンの丘ホーム
福岡	○	○	○	認知症の人と家族の会福岡県支部
福岡	○	○	○	筑紫野市介護を考える家族の会
福岡	○		○	直方市社会福祉協議会 認知症の人と 家族の会直方
大分	○	○		認知症の人と家族の会大分県支部
宮崎		○		認知症の人と家族の会宮崎県支部
長崎	○	○	○	認知症の人と家族の会佐世保支部
	34 団体	42 団体	40 団体	

〔資料3〕 「プロフィールシート」

「男性介護者の会/集い」プロフィールシート(2013/2014)

No.1

(記入者: \_\_\_\_\_ )

1.団体名	
2.代表者	
3.所在地	
4.連絡先	電話
	FAX
	E-mail
5.設立・活動時期	① _____ 年 _____ 月発足 ② <u>設立のきっかけ・動機</u>  (貴会のチラシパンフ資料等を添付してください。) ③ <u>貴会のアピールポイントやスローガン、キャッチコピーなど</u>
6.会員数	*約( _____ )人、(内、夫 _____ 人、息子人) *内訳:①介護当事者( _____ )人、②介護者 OB( _____ )人 ③支援者・専門職( _____ )人、④その他 ( _____ )人 * _____ 専 _____ 門 _____ 職 _____ 種 [ _____ ]
7.活動内容 (チラシやパンフなどがあれば添付してください)	<u>例会の開催日や大まかな内容(プログラム)</u>
8.活動資金	会費 [ 有 ・ 無 ] (有の場合 円) 助成金 [ 有 ・ 無 ] (有の場合 円) その他 [ 有 ・ 無 ] (有の場合 円)
9.協力・連携団体	

<b>10.これからやってみたいこと(活動や組織のこれからの方向性)</b>
<b>11. 他団体の活動について知りたいこと、聞いてみたいこと</b>
<b>12.男性介護ネットへの要望や意見</b>

**★お持ちのチラシやパンフレット、広報資料等をお送りください。「ケアメンサミット JAPAN II」の資料集を作成したいと思います。**

**送付先：男性介護ネット(同封の返信用封筒をご利用下さい)**